

【特集】コロナ危機下の中国経済と経営

特集にあたって

伊藤 亜聖

新型コロナウイルスの世界的流行から1年が経過した。すでに未知のウイルスの蔓延は、現代史に確実に書き加えられるべき衝撃をもたらした。中国湖北省武漢市での局地的流行が発覚して以降、瞬く間に全世界へと感染が拡大し、都市閉鎖を含む物理的な措置は、引き続き多くの国々の経済、社会、政治に甚大な影響を与えていた。本特集は、2020年10月17日にオンライン開催された中国経済経営学会・2020年研究大会の特別企画セッション「コロナ危機下の中国経済と経営」の内容に加筆修正を加え、講演記録としてまとめたものである。セッションでは中国の経済と経営への影響を主眼に置きつつ、政府と現地社会の対応まで幅広く議論した。現地に赴くことが難しいなか、北京、武漢の状況を現場で見てきた方々から報告と寄稿を得ることで、臨場感あるセッションとなった。従って、本特集の内容は基本的にはセッション開催時点での認識をそれぞれの登壇者が述べたものである。

第一論文は丸川知雄会員（東京大学・社会科学研究所教授）による危機下の中国の経済政策を検討したものである。携帯電話の移動データによると、都市封鎖直前の湖北省から人の流出が増えている。そして中国政府は5月末の全人代で雇用対策に重点を置いた方針を提示した。財政出動の規模は国際比較する限り少額にとどまっている一方、その重点は明確で、第5世代移動通信システム（5G）への投資、電気自動車（EV）産業の拡大といった新たな分野の拡大に期待が持てると指摘された。そのうえで著者は中国におけるコロナ対応が「科学の独裁」とも呼ぶべきものであったと指摘したうえ

で、その有効性と懸念点に触れている。

第二論文は岩永正嗣氏（日中経済協会・北京事務所所長）による北京からの視点からの報告である。北京市での健康コードの利用状況がつぶさに報告され、また日中経済協会北京事務所と中国日本商会が実施した日系企業へのコロナ緊急アンケートの結果が紹介された。また感染対策として人々の出入りを団地レベルで管理する、いわゆる「封鎖式管理」を実施した社区の役割とその様子も言及された。中国経済のV字回復への軌跡と感染再拡大の可能性を踏まえた緊張感を伝えるものとなっている。

第三論文は佐伯岳彦氏（日本貿易振興機構・武漢事務所所長）による湖北省・武漢市における観察である。武漢市は自動車産業を中心にサプライチェーンの拠点となってきたが、これに加えて若年層が多いゆえの消費都市としての側面、そしてハイテク産業の発展の状況も注目を集めようになっていた。そのうえで、コロナ拡大のなかの武漢については、1月19日深夜に武漢市当局が136件の発症という通知を出したことに驚いたことや、同月23日未明に都市封鎖の通知があったこと、そして武漢にいる日本人を把握するためにWeChatグループを組織したことが報告される。現地日本人の動きやチャーター便での帰国への取り組みなど、生々しい現場の状況が紹介されている。

続いて特別セッションの構成に従い、上記3つの報告に対して寄せられた李春利会員（愛知大学・経済学部教授）と西村友作会員（对外経済貿易大学・国際経済研究院教授）からのコメントを収録した。李会員からは、危機への対応という観点から、歴史的な視点で比較を行う

必要性が提起された。ここで指摘されたのはSARS流行からの学習効果、そして当時にも見られた非接触型でのデジタル経済の発展といった効果である。続いて西村会員は、中国政府の経済対策を検討し、短期の視点では投資駆動型への転換とならざるを得ないこと、そして中長期的視点から見ると懸念も残ることが指摘された。とくに地方専項債の増加の傾向が報告される。目下進む新型インフラへの投資によって、イノベーションを生んで経済成長をもたらすという好循環になるのか、それとも2008年の金融危機後にも問題となった地方の債務問題が再燃するのかが、今後の中国経済の重要な論点であると指摘されている。

2020年の中国経済は2.3%成長であったことが、2021年1月に公表され、セッションでも報告されたV字回復の傾向は確かめられた。その

うえで中小企業やサービス業への多大な影響も報道されており、単純なV字型回復というよりも、他国でも報告されるK字型復旧（V字回復する部分と谷底への落ちる部分が同居する状況）を見る余地もある。これらの点も含めて、今後より一層、学術的な分析が必要とされるが、本セッションの記録が今後の研究活動において、何らかの参照点となれば幸いである。

なお、本特集の編集にあたっては、東京大学社会科学研究所・現代中国研究拠点から編集への補助を受けた。また特別セッションの開催にあたっては、木崎翠会員（横浜国立大学・経済学部教授）に共同司会をお引き受けいただき、とりまとめ頂いた。特別企画セッションの企画者一人として感謝を申し上げる。

（いとう あせい・東京大学）